基本的な考え方

1. 外来語を仮名で書き表す場合の基本として、国民のだれでもがその言葉の音を聞き分けられ、また発音できるものでなければならない。
2. 外国語と外来語を峻別することは難しいが、今回審議すべき外来語の対象を現代の国語の範囲においてほしい。
3. 外国語の移入経路や、外国語を耳で聞き取って表記した場合、原語の綴り字を仮名に置き替えた場合などによって語形の異なる外来語がある。それらがすでに定着したものならばそれぞれ認められるべきであり、表記の問題を語形の問題にまで及ぼさないでいただきたい。
4. 昭和29年の国語審議会報告「外来語の表記」によって、表記が固定し、慣用化されている言葉が多くある。一度覚えた表記の習慣を改めることは国民に不安を与えたり負担を強いることになるので、最大限に現行の慣用を尊重してほしい。

また同時に、今日の国際化社会にあっては、外国との接触も多く、外国語教育の普及の影響もあって、昭和29年のころとは事情を異にしている。当時一般に聞き分けも発音も難しかったと思われる表記法も現在では数多く用いられており、原音に近い表記を望む声もある。

こうした現況をみると、慣用の尊重と原音主義的な表記をいかに無理なく調和させるかが必要とされている。

5. 一般語と固有名詞を同列に論じられない面もあるが、地名・人名などの固有名詞についても今期の審議会と同時に審議してほしい。なお、地名・人名についての具体的問題については、当協会の考え方は先に提出した服部委員のアンケートの意見のとおりである。(別紙参照)

6. 教育との関係, 公的な場での用法, 各専門分野での表記, 私的な場での言語生活, これらの言葉を用いるそれぞれの場を考慮して, 表記のきまりを実施するにあたっては柔軟な姿勢が望ましい。
7. これから入ってくる外来語, 外国の地名・人名への対応も必要である。そのためには, 外来音に対する国語の仮名の一覧, 個々の外来音に対する仮名表記の法則を定めておく必要がある。
8. 外来音・原語の綴り字に対する仮名表記についての当協会の意見を参考までに昭和29年の報告を基に以下に記す。

外来語表記に関する具体的意見

(囲みの中の規定は昭和29年国語審議会報告。配列については内容に応じて若干の整理を行った。)

A) 基本原則

1 外来語は、原則としてかたかなで書き、別表「外来語を書くときに用いるかなと符号の表」の範囲内で書く。

〔意見〕

1. 基本的には、上記のとおりでよい。
2. ただし、平仮名、漢字で書く習慣のあるものは、それを認める。
3. なお、上記仮名表は、外来語を書き表すときに用いる仮名をすべて網羅してあることが前提となる。ただし、外国の地名・人名については、現在各種行われている表記を精査し、その結果得られた音韻の表記のうち妥当な表記を仮名表に組み入れる。その際、一般の外来語に用いない、外国の地名・人名の表記に特有の音韻はしるしをつけるなどして一般外来語に及ばないように配慮する必要がある。なお、外国の地名・人名についても、要望書にあるように、現代の一般の日本人が聞き取り発音できる範囲の音韻でなくてはならない。

2 慣用の固定しているものは、これに従う。

ケーキ (cake)

リュックサック (Rucksack)

〔意見〕

1. 上記のとおりでよい。
2. 例示については誤解を招かないもの、ゆれ語形のないものに替える。
(リュックサックは、リックサックというゆれがあり不適切である。)

B) 原語の発音を仮名にうつす場合の一般的な規則

3 はねる音は「ン」と書く。
テンポ (tempo) トランク (trunk)

〔意見〕

1. 上記のとおりでよい。
2. 「ム」の仮名は用いない。(「テムポ」とは書かない。)

4 つまる音は、小さく「ツ」を書き添えて示す。
コップ (kop) カット (cut)

〔意見〕

上記のとおりでよい。

6 よう音は、小さく「ヤ」「ユ」「ヨ」を書き添えて示す。
ジャズ (jazz) シュークリーム (chou à la crème)
チョーク (chalk)

〔意見〕

上記のとおりでよい。

7 長音を示すには、長音符号「ー」を添えて示し、母音字を重ねたり、「ウ」を用いたりしない。

ボール (ball) オートバイ (auto-bicycle)

なお、原音における二重母音の「エイ」「オウ」は長音とみなす。

ショー (show) メーデー (May Day)

〔例外〕 エイト (eight) ペイント (paint)

〔意見〕

1. なお書き・例外を含めて、原則としては上記のとおりでよい。
2. 「イ」「ウ」「エ」の各列の長音(原音の二重母音を含む)において、長音部分を「イ」「ウ」「エ」で書き表す慣用のあるものについては、許容する場合があつてよい。

キーワード (key word) メイデー (May Day)

ボウリング (bowling) ボウル (ball, bowl) バレエ (ballet)

8 イ列・エ列の音の次の「ア」の音は、「ヤ」と書かずに「ア」と書く。

ピアノ (piano) ヘアピン (hair-pin)

〔例外〕 ダイヤ (diamond, diagram)

タイヤ (tire, tyre) ベニヤ (板) (veneer)

ワイヤ (wire)

〔意見〕

1. 例外を含めて上記のとおりでよい。
2. 「パイヤ」等を例外の例に入れる。

C) 原語の発音を仮名にうつす場合の特殊な原則

9 原音における「トゥ」「ドゥ」の音は、「ト」「ド」と書く。

ゼントルマン (gentleman)

ブレントラスト (brain trust)

ドライブ (drive) ドラマ (drama)

〔例外〕 ツーピース (two piece) ツリー (tree)

ズック (doek) ズロース (drawers)

〔意見〕

1. 例外を含めて原則としては、上記のとおりでよい。
2. 「トゥ」「ドゥ」と書くことが慣用となっている場合については、「トゥ」「ドゥ」も認める。
3. 例示は適切なものに替える。(ゼントルマンはジェントルマンの形が一般的。ブレントラスト、ズロースは例示として不適切。)

10 原音における「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」の音は、なるべく「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」・「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書く。

プラットフォーム (platform)

ホルマリン (Formalin) バイオリン (violin)

ビタミン (Vitamin) ベランダ (veranda)

ただし、原音の意識がなお残っているものは、「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」と書いてもよい。

ファインプレー (fine-play)

フェミニスト (feminist) ヴェール (veil)

ヴォキャブラリー (vocabulary)

(注記) 国語審議会総会において、この条項について、たとえば「フェル

ト」か「フェルト」か、「フィルム」か「ファイル」かをめぐって、(1)外来語の発音の事実をどう認めるか、(2)その事実をどうかなで書き表わすか、(3)その発音なり表記なりを決定するとき現実どおりにするか将来を考えるか、(4)その考え方にも簡易化のほうに向かって考えるか、日本語の音を豊富にするほうに向かって考えるかについて論議された。

〔意見〕

1. 原音における「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」の音は、「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」と書く。
 ファインプレー (fine-play)
 フィンガーボール (finger bowl)
 フェミニスト (feminist) フォークダンス (folk dance)
2. 「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」で書く場合を認める。
 ホルマリン (Formalin)
3. 「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」のように2字目を小書きにしないで書く慣用も認める。
 ファン (fan) フェルト (felt)
 フィルム (film)
4. 「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」で書く表記が定着しているものは、その形を認める。
 プラットフォーム (platform)
5. 原音における「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」の音は、「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書く。
 バイオリン (violin) ビタミン (Vitamin)
 ナイーブ (naive) ベランダ (veranda)
 ボーカル (vocal)
6. 「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」と書く場合も認める。
 ヴァイオリン (violin) テレビジョン (television)
 ランデヴー (rendez-vous) ヴェール (veil)
 ヴォキャブラリー (vocabulary)

11 原音における「ティ」「ディ」の音は、なるべく「チ」「ジ」と書く。

チーム (team) チンキ (tinc(tuur))
ラジオ (radio) ジレンマ (dilemma)

ただし、原音の意識がなお残っているものは、「ティ」「ディ」と書いてもよい。

ティー (tea) ビルディング (building)

(意見)

1. 原音における「ティ」「ディ」の音は、「ティ」「ディ」と書く。

アイ스티ー (ice tea) ティンパニ (timpani)
オーディオ (audio) ビルディング (building)

2. 「チ」「ジ」と書くことが定着しているものは、それを認める。

チケット (ticket) チンキ (tinc(tuur))
ラジオ (radio) ラジウム (radium)

3. 「チ」「ジ」と書く慣用のあるものは、それも認める。

チーム (team) ジレンマ (dilemma)

12 原音における「シェ」「ジェ」の音は、なるべく「セ」「ゼ」と書く。

セバード (shepherd) ミルクセーキ (milk-shake)
ゼスチュア (gesture) ゼリー (jelly)

ただし、原音の意識がなお残っているものは、「シェ」「ジェ」と書いてもよい。

シェード (shade) ジェットエンジン (jet engine)
ページェント (pageant)

(注記) 国語審議会総会において原音における「シェ」「ジェ」の音を、なるべく「セ」「ゼ」と書くことについて論議があった。「シェ」「ジェ」は日本人に可能な音であるので、むしろ「シェ」「ジェ」と

書くほうを本体とすべきではないかというのである。

〔意見〕

1. 原音における「シェ」「ジェ」の音は、「シェ」「ジェ」と書く。
 シェパード (shepherd) シェア (share)
 シェード (shade) ジェットエンジン (jet engine)
2. 「セ」「ゼ」と書くことが定着しているものは、それを認める。
 ミルクセーキ (milk-shake) ゼリー (jelly)
3. 「セ」「ゼ」と書く慣用のあるものは、それも認める。
 セバード (shepherd) ゼスチュア (gesture)

13 原音における「ウィ」「ウェ」「ウォ」の音は、なるべく「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書く。

ウイスキー (whisky) ウェーブ (wave)
 ストップウォッチ (stop-watch)

ただし、「ウ」を落とす慣用のあるものは、これに従う。

サンドイッチ (sandwich) スイッチ (switch)

(注記) 国語審議会総会において、原音における「ウィ」「ウェ」「ウォ」の音をなるべく「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書くことについて、(1)原音をいかに取り入れるか、「ウィ」「ウェ」「ウォ」で取り入れていいのではないか、(2)「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書き表わすときには、「ウ」と「イ」「エ」「オ」との発音をどうするのかという点が論議された。

〔意見〕

1. 原則として上記のとおりでよい。
2. 「ウィ」「ウェ」「ウォ」と書く慣用のあるものは、これを認めてよい。
 ウイスキー (whisky) ウェット (wet)
 ウォーター (water)

3. 上記の但し書きが定着しているものは、これを例外とする。

スイッチ (switch)

4. <sandwich>については、「サンドウィッチ」「サンドウィッチ」
「サンドイッチ」の3とおりを認める。

- 14 原音における「クァ」「クィ」「クェ」「クォ」の音は、なるべく
「カ」「クイ」「クエ」「コ」と書く。

レモンスカッシ (lemon-squash) クイズ (quiz)

スクエア (square) イコール (equal)

ただし、原音の意識がなお残っているものは、「クァ」「クィ」
「クェ」「クォ」と書いてもよい。

スリークォーター (three quarter)

クォーターリー (quarterly)

〔意見〕

上記のとおりでよい。ただし、上記の但し書きを例外とする。

- 15 Xを「クサ」「クシ」「クス」「クソ」と発音する場合は、「キサ」
「キシ」「キス」「キソ」と書かないで、なるべく「クサ」「クシ」
「クス」「クソ」と書く。

タクシー (taxi) ボクシング (boxing)

〔例外〕 エキストラ (エ^xストラ) (extra)

エキス (エ^xス) (extract)

テキスト (テ^xスト) (text) タキシード (tuxedo)

〔意見〕

1. 本則は、上記のとおりでよい。
2. 上記の例外を原則として例外とする。

3. 上記の例外で、×印のついた表記のうち、「クス」と書く慣用のあるものは、それも認める。

エクストラ(extra) テクスト(text)

D) 原語の綴りが関係する場合の規則

- 5 従来、原語のつづりに引かれて、「ン」(はねる音)「ッ」(つまる音)を添えて書き表わしたものは、「ン」「ッ」を使わない。
- コミュニケ(コ[×]ンミュニケ) (communiqué)
 コピー(コ[×]ッピー) (copy)
 アコーディオン(ア[×]ッコーディオン) (accordion)
 アクセサリー(ア[×]クセ[×]ッサリー) (accessary)
 キス(キ[×]ッス) (kiss)
- (例外) シャッター (shutter) バッター (batter)
 バッテリー (battery) カッティング (cutting)

(意見)

1. 例外も含めて原則として、上記のとおりでよい。
2. 「ッ」(つまる音)を書き添える慣用のつよいものは、それを認めてよい。

キス (kiss)

- 16 原語(特に英語)のつづりの終わりの -er, -or, -ar, などをかながきにする場合には、長音符号「ー」を用いる。
- ライター (lighter) エレベーター(elevator)
 ただし、これを省く慣用のあるものは必ずしもつけなくてもよい。
- ハンマ (hammer) スリッパ (slipper)
 ドア (door)

〔意見〕

1. 原則として、上記のとおりでよい。
2. 上記の但し書きを許容とする。
3. 上記の例外中、ハンマを省く。(「ハンマー」、つまり本則の例である。)
4. 上記の但し書きの例示中、「スリッパ」は例外とする。
5. 「コンピュータ」「ワードプロセッサ」などの科学技術用語は、末尾の長音を落とすことが慣用化しつつある。これらを許容とするか、第2の本則とするか、検討課題であるが、いずれにせよ長音符のあるものもないものも認めるべきである。
6. <gesture>など、ure の綴りを「チュア」とするが、<picture> は、「ピクチャー」と書き、「ピクチュア」とは普通書かないことから分かるように、一般に日本語として発音する場合は、<gesture> は「ジェスチャー」である。したがって、本条の本則に、-er, -or, -arとともに、-ure も含め、「ジェスチュア」を許容とするべきである。

17 語末(特に元素名等)の -um は「ウム」と書く。

アルミニウム (aluminium) ラジウム (radium)

〔例外〕 アルバム (album) スタジアム (stadium)

〔意見〕

例外を含めて、上記のとおりでよい。

18 原音における「テュ」「デュ」の音は、「チュ」「ジュ」と書く。

スチュワードess (ス^xテュワデス) (stewardess)

チューブ (テ^xューブ) (tube)

ジュース (deuce) (スポーツ)

ジュラルミン (デュ^xラルミン) (duralumin)

〔例外〕 プロデューサー (producer)

〔意見〕

1. 原則として、上記のとおりでよい。
2. 「テュ」「デュ」と書く慣用のあるものは、それも認める。
 チューバ (tuba) (楽器)
 デュース (deuce) (スポーツ)
3. 上記の例外を例外とする。ただし、これを許容とすることもありうる。

19 原音における「フュ」「ヴュ」の音は、「ヒュ」「ビュ」と書く。

 ヒューズ (フューズ) (fuse)
 レビュー (レヴュー) (revue)
 インタビュー (インタヴュー) (interview)

〔意見〕

1. 上記のとおりでよい。
2. ただし、「ヴュ」と書く慣用のあるものは、それも認める。
 レヴュー (revue) インタヴュー (interview)

〔注〕 外来語を書き表わす場合には、「キ」「エ」「ヲ」「ヅ」「ヂ」は使わない。

〔意見〕

上記の規定（特に「ヲ」「ヅ」「ヂ」）は、基本原則に属する事項であるので、〔注〕ではなく、基本原則または「外来語を書くときに用いる仮名の表」に明示することが望ましい。

外来語を書くときに用いるかなと符号の表

(注) () 印は一般の外来語にはあまり使われない。

ア	イ	ウ	エ	オ	キャ	キュ	(キョ)
カ	キ	ク	ケ	コ	シャ	シュ	ショ
サ	シ	ス	セ	ソ	チャ	チュ	チョ
タ	チ	ツ	テ	ト	(ニャ)	ニユ	(ニョ)
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	(ヒャ)	ヒユ	(ヒョ)
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	(ミャ)	ミユ	(ミョ)
マ	ミ	ム	メ	モ	(リャ)	リユ	(リョ)
ヤ		ユ		ヨ	ギャ	ギユ	(ギョ)
ラ	リ	ル	レ	ロ	ジャ	ジュ	ジョ
ワ					ビャ	ビユ	ビョ
ン					ビャ	ビユ	ビョ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ		ウイ	ウエ ウオ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	クァ		
ダ			デ	ド			シェ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ			チュ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	(ツァ)		(ツェ) (ツォ)
						テイ	
					ファ	フィ	フェ フォ
					グァ		
							ジュ
						ディ デュ	
					ヴァ	ヴィ ヴ	ヴェ ヴォ
					ン (はねる音)		
					ッ (つまる音)		
					ー (長音符)		

〔意見〕

1. 表記の規則は別にして、地名・人名までを含めた外来語を表記する際に用いる仮名を網羅したものであること。
2. 下記のものを加える。
 - 「クィ」「クェ」「クォ」
 - 「トゥ」「ドゥ」
 - 「テュ」
 - 「フュ」
 - 「ヴェ」
 なお、「クァ」「クィ」「クェ」「クォ」
 「グァ」
 「テュ」
 「デュ」
 「トゥ」
 「ドゥ」
 「フュ」
 「ヴェ」
 「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」
 についても（ ）を付する。
3. 複合語を表記する場合の「・」「- (ハイフン)」「= (ダブルハイフン)」の使用規準、語の区切りを表す「・」と「、」または「,」の使い分けの規準等については、慣用に従うとすべきである。

E) まとめ

- a) 例示については、なるべく身近で分かりやすい例であることが望ましく、かつ当該の条項にのみ該当する例であることを希望する。(たとえば、「ジェントルマン」は「ジェ」か「ゼ」か、「ト」か「トゥ」かの2規定に該当する例であるので適切でない。)
- b) 例示は、できるだけ体系だてて豊富に示してほしい。例示の欠落は困る。

(たとえば「ヴ」について規定しながら例がないなど)

- c) 「原音の意識」などという語は避けることが望ましい。日本語の語彙として外来語を表記するとき、原音や原綴りを想起せねばならない規定は一般人向けではない。
- d) 「プロマイド」－「プロマイド」, 「バドミントン」－「バトミントン」
「ネーブル」－「ネーブル」など、清濁のゆれについても言及していただきたい。
- e) 「ヴ」の仮名の本則化には反対である。日本人の日本語における実際の発音は歯唇音ではなく、単に原綴りの形の上からだけの表記は無意味である。
また、一般人が表記する際に、原綴りを想起しながら「ヴ」か「ブ」かを書き分けるのは、日本語を表記するという大原則から考えてもおかしい。
(実際に [v] 音を多数が発音できるようになれば別)
さらに、[v] 音と [b] 音の区別、つまり「ヴ」と「バ」行音の区別の混乱を招きかねない。([b] 音まで「ヴ」で書く人もいる。)

F) その他の要望

日本語におけるアルファベットの字母の呼称を決めてほしい。NHK, JR などアルファベットの字母が日本語の中で用いられている現状にかんがみ、ローマ字を仮名で表記する際の基準が必要である。

ただし、別の慣用のある読み方(表記)は、許容として認めることが望ましい。

以 上

別紙 地名・人名の表記の取扱い方等に関する意見

1. 一般の外来語のほかに、地名・人名の表記についても取り上げる必要がある。
〔理由〕現在、マスコミをはじめ多くの場面で、各種の表記が混在しており、それに一定の目安を設けることが必要である。
この際、同一地名が歴史的に異なった表記（ベニスーベネチア等）をとる場合にも配慮してほしい。
2. 地名・人名の表記についても取り上げる場合、取り上げる手順については、一般の外来語についてまず取り上げるが、その際、地名・人名については全く考慮の外に置くのではなく、ある程度考慮しながら進めるのがよい。
〔理由〕まず、一般の外来語の表記のルールと仮名表を、地名・人名も視野に入れつつ定め、しかる後に地名・人名の表記のルールを定める。仮名表は一表とし、地名・人名に特有の音韻については一般語のものの中に識別できる形で組み入れていきたい。
3. 地名と人名の表記について取り上げる場合、地名と人名のうちでは、地名から先に取り上げるのがよい。
〔理由〕地名の方が見通しがつけやすいからである。そこでできたルールを人名にも演繹していけばよい。その過程では欧米に偏しない、はば広い調査が必要となろう。
また、今後新たに入ってくる地名・人名についての恒常的な調査・審議機関が設けられることを望む。
4. 地名・人名の表記についても取り上げる場合、中国・韓国等の地名・人名の原音による片仮名表記については、何らかの形で取り上げる必要がある。
〔理由〕政治的問題の他に歴史的な表記の問題もあろうが、一定の目安をきめる必要がある。
○仮名で書くのか、漢字で書くのか ○仮名で書く場合、現地音に近い形で書くのか、日本の漢字の音で書くのか等

5. 外来語の表記と、外国語学習や国際化などとの関連について

外来語はあくまでも外国語ではなく、日本語の音韻・アクセントおよび音節構造で発音されるものであり、外国語のスペルや原発音・アクセントと異なったものである。このことを外来語表記を考える上での大原則とする必要がある。

一方、外国語の学習が進むにつれ、それまでの日本人の発音できなかった音韻が、日本語として定着するようになっていく。いわば、外国語教育が外来語の表記に先行することがあるという関係である。しかし、外国語教育における発音と、外来語の発音・表記とは異なったものであり、両者を混同するような外来語表記における過度の原音主義は好ましくない。

国際化の問題についていえば、欧米中心主義でなく日本と交流の深い東アジアをはじめ、広くその他の諸地域の言語にも視野を広げ、それを受け入れる門戸を開いたルールづくりをすることが望まれる。

6. 外来語の表記をめぐる問題について

近い将来、外国語を外来語として日本語に採り入れる場合の目安になるように、語彙の範囲を現状で制限することなく、ルールを設けてほしい。その際、原スペルや原発音に極度に忠実であることは避けるべきで、日本語の音韻として広く定着する表記（発音）でなくてはならない。

なお、たしかに現在外国語の過度の氾濫があるが、これは日本人の言語生活の一断面にすぎず、必ず自然に淘汰され、必要なものが必要な量で定着していくであろう。